座談会

LEC 会計大学院で学んで―現役税理士が語るその魅力と成果―

（上段左から）

飯田浩恵氏	2006 年度入学生（長期履修学生制度適用 現在も在学中）
丸茂隆氏	2005 年度入学生（長期履修学生制度適用 2008 年 3 月修了）
内村博矢氏	2006 年度入学生（2008 年 3 月修了）

（下段左から）

山本宣明	LEC 会計大学院講師
諸井勝之助	LEC 会計大学院教授 ＜司会＞
若杉明	LEC 会計大学院教授

（誌上参加）

田口寛氏	2006 年度入学生（2008 年 3 月修了）

LEC 会計大学院には、これまで 7 名の現役税理士の方が入学されています。皆さん既に第一線で活躍するプロフェッショナルでありながら、更に自らの能力を伸ばすため、より広いより専門的な知識と実践力を身につけるべく、意欲的に学修に取り組まれました。今回はその中から代表して 4 名の方に LEC 会計大学院での想い出と実務の現場での効果について大いに語っていただきました。なお、田口氏は誌上参加いただいています。

座談会開催日　2009 年 10 月 10 日（土）

１．常に勉強していないと遅れるという感覚をすごく持っていた

諸井：皆さんは既に会計の専門家として活躍しておられるわけですが、さらに LEC 会計大学院にて学ぼうとされた動機について伺えたらと思います。

丸茂：私はずっと会計事務所で働いており、ちょうど財務諸表論の試験が終わったのが 1997 年でした。そして 1998 年から会計ビックバンで時価会計が入り、その渦中で、仕事をしていて分からないことが結構出てきたりして、仕事をこなす中で忸怩たる思いが積もっていきました。最新の知識を自分の中に入れないとこれからついていけないだろうなと感じていた矢先に、LEC 会計大学院を知り入学を考えました。

内村：私の場合には、年齢的にもう 60 歳まで 5 年しかないと考えた時、ここでちょっと勉強したいなという気持ちが起きたんです。税理士試験の科目にない勉強、例えば管理会計や監査論、特に企業法などですね。それをまず勉強したいな、と思いました。もう 1 つは、恐れ多くもと言いますか、チャンスがあれば公認会計士試験を受験してみたいなと。会計大学院を修了すると、短答式試験 3 科目の免除申請ができるので。これがやはり魅力でしたね。

丸茂：私にもそれは魅力でした。

内村：そんな感じで動機と魅力が結びついてすーっと入学したという感じです。今、その選択をして間違いはなかったと思っています。

諸井：LEC 会計大学院を選ばれた理由はなんですか？

内村：自分は小さいながらも事務所持っていますので、やはり授業が夜間と土曜・日曜にあるというのがナンバーワンの理由です。幸いにして、私の自宅が船橋で水道橋まで 50 分程度ですし、事務所が新橋でまた近い。その 2 つが選択の際の魅力でした。

諸井：飯田さんはいかがでしょうか。

飯田：ちょうど会社法が変わるという時期でそれを勉強したかったということです。私が税理士試験に合格したのが 2005 年。続けて勉強していかないと自分の中でダレてしまうという気持ちがありました。そこで、学習する場を探していたところに、会社法も会計も学べる LEC 会計大学院と出会いました。資格をとったところがスタートラインだ、ということを身に染みて感じていたので、続けて勉強する習慣をつけて、それを逃さないようにするというのが大きい要因でした。

田口：私の場合には、LEC 会計大学院の入学者受入方針にあるような「会計実務家としての高度な実務専門能力」を身につけたいと考え入学しました。入学してまず驚いたことは、その錚々たる教員陣です。専門分野の第一人

者であります学者の先生、実務家の先生が揃っておられ、その先生方が皆さんどなたも大変明るく前向きなことがとても印象的でした。

諸井：田口さんは、長崎から飛行機で 2 年間通学されたんですよね。長崎でご自分の事務所を持ちながらの勉強は、とても大変だったのではないですか。

田口：長崎―東京間の移動時間 4～5 時間の所要時間が貴重な勉強時間となりました。その時間に予習や宿題をこなしました。税理士業務については、業務時間内に携帯電話で職員と打ち合わせをしたり指示を出したりして対応しました。大学院の学修と業務を両立させて動くことは大変ではありましたが、それが充実感につながっていたと思います。事務職員も理解してくれ、私が不在の間も毎日の業務をスムーズにこなしてくれ感謝しています。また家族も、不在の間、電話やメールのやりとりをする中で温かく見守ってくれました。在学中は本当にやりたかったことが今できる、という喜びで大変充実していました。身体が持つかどうか心配でしたが、なんとか乗り切りました。

諸井：本当に 2 年間、大変な努力だったと思います。これからの大きな底力になると確信しています。改めて心から敬意を表します。ところで皆さん、税理士試験はいつ頃お受けになったんですか？

内村：私は簿記論と財務諸表論に合格したのが 32、3 年前です。ですから、この大学院に入学した際も知識としては全く駄目でした。例えば大山先生の簿記論Ｉの中で、昔は「手形割引料」というのがあったんですが、今はもうそんなのないんですね。「売却損」なんです。

丸茂：僕も「割引損」です。

飯田：「割引損」ですよね。

内村：だから大山先生に知識を修正してもらいました。それと我々の頃には税効果会計がありませんでした。そんな感じですから、もう全然駄目なんです。相当な陳腐化でした（笑）。

丸茂：私は 1997 年に合格しましたが、1998 年からキャッシュフローが出題範囲に入り、また 1999 年からは税効果が入ると。それで、合格するなら今のうちだ、範囲が広がる前でないと大変なことになっちゃうと言われたことを思い出します。

飯田：私は 1999 年に合格したのですが、連結が入る前に合格しようと言われていました。

一同：なるほど（笑）

諸井：どんどん範囲が広がって難しくなりますね。これから益々そうなるでしょ。

丸茂：ですから、常に勉強していないと遅れるという感覚をすごく持っています。だから LEC 会計大学院に入学して勉強したかった、というのが私の動機です。税理士試験の出題範囲がどんどん広がっていくということは、それ

だけ税理士のニーズが広がっていくということであって、試験に合格したからといって、その後勉強しなかったら全然対応できないですから。

２．100%満足　実際の税理士実務においてあらゆる面で役立っている

諸井：実際に LEC 会計大学院で学ばれていかがでしたか？

内村：100%満足しています。実際の税理士実務においてあらゆる面で役立っていると言えますね。税理士試験にない科目を勉強したかったという点から言いますと、例えば監査論は、檜田先生や大山先生などの授業を全部履修し、監査に関する要点を柱に確認や分析的手続を学びました。まずそれが大きくためになりました。実務で活きているということですね。もう１つ大きいのは内部統制。檜田先生の授業を履修している時はまだ施行前でしたが、檜田先生の授業を聞いて、内部統制というものは中小企業の業績を向上させるために使えるな、と私はとらえました。実際まさにそのとおりだったんです。利益をあげたい、業績を上げたいという場合、全てに当てはまるんです。すぐに思いつくところでは監査論が一番実務に直結したと言えますね。それから企業法もまた設立や資金の調達などの勉強ができるので、我々のお客様である中小企業においても、この設立のからみでの株の売買の発生などについて大変に役立っている。合わせて経営学については、大企業でも中小企業でも、モチベーションやリーダーシップなどについては共通の考え方ができます。諸井先生に教わったファイナンス関係の投資の理論についても良く相談を受けますので、やはり学んだ知識が活きています。LEC 会計大学院で学んだことを応用して、実務に利用させてもらっているということで、本当に大満足しています。しかも、お陰様で私は今年の公認会計士短答式試験に合格しました。

山本：おめでとうございます！

諸井：そうですか、それは素晴らしいですね。

内村：ですから、入学時の志望理由は全部クリアしたことになります。

飯田：すごいですね。

内村：それから、会計大学院を修了したということに対して自負心といいますか、自分の中での内的なプライドがすごく持てています。

諸井：嬉しいお話です。本当にね。

内村：これもう私の本音ですね。実務においても大いに役立っていますし、もう本当にありがたいと。その一言ですね。お世辞じゃないです、本音です。すいません、ちょっと喋りすぎました。

田口：私も監査論の学習は大変印象に残っています。第一に自分自身の人間性を問われる感

がありました。例えば、私たち税理士は今後成年後見人となる場合も生じてきます。事務処理の必要な支出について、本人の財産の中から費用を支出することができ、また後見人の立替費用についても求償することができます。後見人は、就任とともに、後見に要する費用につき年間の予定を立てなければなりません。したがって、事務費についても予算を立てることが必要になってきます。このような案件に対し、公正な立場で行動する必要があるのです。「監査論」の学習においては、規約や実務面のみではなく、外観的独立性や倫理観の大切さを毎回講義においてご教授いただき、誰からみても公正な立場を貫く力を養うことの必要性をとても感じました。

丸茂：私の場合、実務において、シミュレーションの知識が大変役立っています。小林健吾先生の授業でエクセルのソルバーを使って予測値を出すことを学んで、それが実際に同属会社とかの税金計算などに非常に有効でした。過去 5 年間の実績をとり、法人税や住民税、それから健康保険などの数値を表に当てはめ、給料がどのくらいなら一番最小値におさまるのか、ということを算出できる。それが非常に好評で喜ばれています。お客様にこういうものが提供できるというのは大変なアドバンテージです。私の中でも具体的数値をもって提案できるというのがすごく重要だなと感じていて、これはもう小林先生の授業を履修したからこその効果だと思っています。あと、監査論の学修という点では、リスク回避というところに実はニーズがあるような気がします。監査論を学んでみると、税務調査の面もまさにそうですし、自分が仕事を進める上でも、ここのところは力を入れていかなくてはいけない、ここのところはある程度流しても良いということが、取捨選択できるようになってきています。これも大変にありがたいところです。

３．根本はやはりお客様の視点 それをどれだけ満足させることができるか

飯田：私は特に企業法の知識がないといけないと感じています。役員変更の時などは必ずアドバイスしなければいけませんし。今、事務所を記帳代行型から経営指導型に移しているのですが、それに関しても、お客様のところが育つまでは、うちから出向者を入れてある程度人材育成し、それから渡すということになります。税理士事務所といっても記帳代行では食べていけないので、そういう経営指導を行っています。必ず、経理は何のためにあるのか、常に自分の目で数字を確認しなさい、と。数字は結果ではあるけれどもプロセスでもあります。だから自分のところで数字を確

認できるように、無理にでも出向者を入れて、数字を確認するよう指導をし、だんだんそれが出来てくると、今度はその上の段階に至る。これから更にどうしていったら良いのという指導に取り組むことが必要になってきます。

内村：ステップですよね。

飯田：ステップですね。自分の事務所の人材を育てるということも必要なんですが、お客様を育てる事も必要ですね。

山本：付加価値の高い税理士でないと生き残っていけないというのがひしひしと伝わってきますね。

内村：自分自身に対してもそうですが、私は職員に対しても「4つの力」、つまり分析力、コンサル力、プレゼン力、アピール力、この 4 つをなるべく極めなさい、勉強しなさいと言っています。その 4 つがある程度バランスよく身につきますと、顧問先のニーズをある程度は満足させる事が出来ます。そしてその 4 つの力を高めるためには、LEC のような会計大学院に、現役の税理士さんもこれから税理士を目指す方も、ぜひ通われた方が良いのではないかなと思います。これは私自身の実感からです。お客様は、相手が会計士だから税理士だからということではなく全てプロとみなしますから。あの人は税理士だから企業法を知らなくていいんだとか、あの人は監査論知らなくていいとか、そんなこと誰も言わないですよ。

山本：なるほど。

内村：ですからやっぱり、これから税理士を目指す方、まして事務所を持たれて職員の方がいらっしゃる方の場合は尚更ですよね。根本はやはりお客様の視点です。そのお客様の視点をどれだけ満足させることができるか。そのためにはやはり会計大学院で広い知識を学習して、お客様に還元する。そうすると寄せる汐波じゃありませんけど、結局は報酬として自分の方に返ってきますから。多くの税理士が勉強をすれば最終的には我々同業者の実力は全体的に上がっていきます。

丸茂：現代は正直コンピュータが簿記をやってくれる時代ですので、出てきた数字のどこがおかしいかということを瞬時に見抜く力と、その他の付加価値を、会計事務所が担っていくんだろうな、と思います。

若杉：今までは財務諸表などを作ることばかり教えていたんですね。それをどう使うかとか、経営にどう活かすかとか、そういう教育はわりとおろそかにしてきました。

内村：分析ですよね。

若杉：そうなんです。

内村：財務分析論の授業で扱った、東芝や上場会社の決算書・有価証券報告書を見ての分析なんかは、相当私には新鮮味がありました。あれはご存知のとおり、税理士試験の簿記論・財務諸表論の勉強には全くないものです

から。で、即、実務で使えるものです。

丸茂：キャッシュフローの期間比較が先生から送られてきましたよね。

内村：ああ！ありました！

丸茂：いまだに持ってます。

内村：あれは本当に良かったですよ。間接法・直接法の分かりやすいのをいただいて、私はあの授業を受けて直接法を理解できました。

若杉：恐らく、社会的に税理士に対して要請するものが変わってきているんですね。税理士としての職業を維持発展させていくためには、今までの税務申告だとか記帳代行とかに留まらず、もっといろんな分野を開発する付加価値を高める努力をしなくてはいけません。

内村：やはりお客様が何を求めているか、結局は業績アップですよね。もう一つはファイナンス。銀行からの資金の調達。もう自ずから、さっき若杉先生がおっしゃった様な方向にもっていかないと、結局淘汰されますよね。間違いなく。

若杉：今の時代、ファイナンスが分からないと会計も分からないと思います。

内村：そうですね。ですからこの大学院に来る前には、投資理論とか企業財務論、そんな言葉も知らなかったです。極端に言えば、先生、私はポートフォリオも知らなかったんですから。

一同：（笑）

飯田：それと現実的には M&A が多いので、それにいかに対応していくかということもあります。もちろん株を動かすとなると税金もつきものですから。会社法を勉強したことで、例えば、議決権のない株式、配当優先株式にして株の評価を下げるということも学びました。実際そういう手法を使ってどんどん株を動かしていって、配当優先株をまた普通株に戻して議決権を取らせるとか。そういうアドバイスも水面下でやっていかないと。

内村：企業法とか監査論、経営学とか統計学など、それをある程度、プロにならなくても、その基礎的なことだけでも理解しておかないとお客さんのニーズに応えられないです。昔、諸井先生がおっしゃったみたいに、「こういうのを知らなかったらドキっとするだろう」、と。その「ドキっ」がしょっちゅうですよ。やっぱりお客さんの方の変化が早いですから。どうしても今、飯田さんがおっしゃったみたいな形でやっていかないと本当にニーズに応えられないですよ。

４：税理士は町医者　対処の知識がないとアドバイスができない

丸茂：入り口は結局税理士なんですよね。司法書士や弁護士、公認会計士はその先にあるものでしょう。やっぱりまずは町医者的な税理

士に相談に来て、じゃあどんな症状なのかというところの知識がないと、その先に振れないですね。対処の知識がないとどうして良いか分からないし、アドバイスもできない。ですから、そういった意味で、あらゆる面で、浅くてもいいからその言葉ぐらい知っておく。で、どこに振ればいいかというのを分かるようにしておく。これは最低条件として必要だと思いますね。

内村：いや今、丸茂さん、いいことおっしゃいましたよ。本当にわれわれは町医者ですよ。難しい案件が出てきたら外注にまわす。弁護士さんとか会計士さんにお願いすると。本当に窓口ですよね。いろんな案件が舞い込んできます。

丸茂：要するに気がつかないと、とんでもないことになる。知っていれば何とかしたのに。それが命取りになりかねませんから。今はそういう時代です。

諸井：皆さんから税理士は町医者という言葉が出ましたが、まさにそうでしょうね。

丸茂：税理士というのは、この案件はどこにもっていけば一番効果的かということを判断して、割り振る窓口の役割なので知識は広く必要です。深くなくても良いというと語弊があるかもしれませんけれども、そういうことだと思います。

飯田：せいぜい分かれていても、相続・資産税専門の税理士くらいだと思います。でも私達の場合には全部やらなきゃいけない。税理士という看板を掲げているからには、この先生に相続のこと聞いても分からないなんて許されない。ですから、私は今年の前半すごく勉強しました。今までにないぐらいに。そういう意味で相続だけじゃなく、新しい会計の科目というのもやっぱり有料研修で、どんどん出かけるようにしています。LEC 会計大学院でも税理士を対象にそういう研修を開いていただければすごくうれしいです。ニーズはすごくあると思います。

若杉：LEC 会計大学院でも税理士会認定研修を実施して、税理士資格取得済みのプロの方の教育にも力を入れています。

内村：そういういうのは大事ですし、またそれに出席するような有資格者じゃないとお客さんのためにならないと思います。

若杉：税理士は付加価値の高い業務を行っていくために、絶えず勉強していなければならないのです。

内村：ええ、そういうことです。お客さんの方が我々より絶対に先に変化していますから。どんなに規模が小さくても。

飯田：ある先生がおっしゃってたんですけど、引き出しを多く持っていれば何かあったときにすぐに対応できる。何の仕事でもそうなんですが、常に勉強していかなければならない。特に私たちの業界は、どんどんどんどん税法も変わるし。

内村：変わりすぎですね、本当に。

飯田：最近は会計が変わって税法が変わるという事が多いので、やはりそれを先に知っていれば、税法が変わっても理解が早いですよね。だからそういう意味でも会計を知っておかないと、ということはあると思うんです。知らなくても、知ってるっていわなければならない。知らないって、言えないです。絶対言えないです。

諸井：言えないでしょ。

飯田：だから、ちゃんとした回答持ってきますので、しばらく猶予下さいって言うしかないですよ。

丸茂：そういえば高田先生も「持ち帰ってちゃ

んとした答えを返答します」と言えたら一人前だとおっしゃってましたね。 ただ、逆のパターンもあります。LEC 会計大学院に入って減損会計を勉強し始めた頃、お客さんに「それは何ですか？」と聞かれ即答できたんですね。今は中小企業が当たり前のように減損会計をやり始めてますが、私はその前にすでにその情報を知っていた。それはかなりのアドバンテージになっていると思います。

内村：そういうのがまさに実務家だと思いますね。やっぱり、普通の学生さんと違うのはそこですよね。我々は学問的な知識はないけれども、感覚で捉えている。

諸井：そうそうそう。

内村：で、それに後から知識がくっついてくると。そういう場合もありますから。そこが学生オンリーの方とは違う良い面としてとらえてもいいんじゃないですかね。

飯田：それは本当に感じます。特に私なんか、勉強を始めたのが遅くて、まだ税理士業務に就いてから 6 年経たないんです。ただ、それまで色んな仕事してきたということが、今になって役に立っていて。色んな職種のお客様でも、大体この職種はこうだろうという検討がつくんですね。実際は税理士業務だけじゃなくて、色んなことをやっています。許認可のいる業種だと、許認可の相談からです。だから県庁とかにもよく行きます。行きますよね？

丸茂：行きます。行きます。これは行政書士さんの仕事じゃないかと思うこともありますが。

飯田：県庁の役人と色々、ああでもない、こうでもないって。

内村：先輩面して言うわけじゃないですけど、それが肥やしになりますよ、将来の。無駄が肥やしになります。実体験したという力ですね。それがなんていうんですかね、変な自信となって実体験で身に付けたものが昇華されるでしょう。

５．この道のプロの方々に LEC 会計大学院を知って欲しい

諸井：LEC 会計大学院は実務家教員と研究者教員の両方から構成されていて、お互いが大変仲がいいんです。実務家と研究者ではお互いに長短がありますから、それを補い合ってやっております。そういうことで、皆さんから色々注文があれば出していただいて参考にさせて頂きたいと思います。LEC 会計大学院で勉強して「ああ、よかった」と思ってくださればね、それが一番良いのですが。

内村：ああもう、それが本音です！大収穫です。もう充分に元を取っています。

諸井：そういうお話をいただけると本当に嬉しいですね。

内村：で、先生が今おっしゃった通りに、実務家の先生と研究者の先生方、そのミックスでレベルの高い授業をしていただいて、私は本当に効果といいますか、実務的に反映させていただいていますので有り難いです。お世辞ではなくて、相当この LEC 会計大学院というのには価値を認めています。

諸井：そういっていただくとね、本当にありがたいですね。

内村：本音です。

飯田：私はちょっと通学の時間が長かったので、もしできればネット配信で授業が受けられれば良いなと思います。通信で勉強されている方というのは、自分自身の生活をコントロールしているので、時間を有効に使ってらっしゃるんですね。もちろん通って来ることで、

生で先生たちの声を聞けるということもすごくためになりますが。

諸井：なるほどね。

山本：聴講受講などに限ってネット配信する、というのもいいですね。

丸茂：実際、今の税理士さんで付加価値を付けたいって思ってらっしゃる方はたくさんいらっしゃるはずなんですよね。だからもう少しこの道のプロの方々に LEC 会計大学院を知って欲しい。僕がこの大学院に来てびっくりしたのは、皆さん質が高いなと思ったことです。プロじゃなくても監査論にものすごい長けてるとか、連結をやっていてその道に関しては右に出るものはいないなど、すごくクオリティーが高いんですよね。そういう人たちと接する事で、自分がいかに殻に閉じこもっていたというか、外に出ようとしなかったかということに気付いたりするんです。そうするとだんだん自分の位置が分かって、人間、位置がわかると不勉強だ、勉強しなければいけないと思うんですよね。そういうことが分かってくるとどんどん自分の中で相乗効果が出てくる。さっき言ったように、どれだけ「ビクっ」とするかですよね。

内村：要は、まだ LEC 会計大学院を知らない方にいかに知ってもらうかということが大事じゃないかなと思います。そうじゃないともったいないですよね。これだけの先生方がいて、かつ授業の中身の濃さですね。私は本当にもったいないと思いますね。ですから、LEC 会計大学院を広めていただきたいのです。税理士の有資格者にとって、お客さんが求めているものを満足させる知識を得られる授業が豊富にありますよ。やっぱり税理士の先生も会計士の先生も LEC 会計大学院のような大学院で少しでも勉強されたほうが結局はお客様のためになるんじゃないかと思います。これは私の本音です。で、それが自分のためになってきますから。間違いないです。

田口：税理士業界は今後、世の中の動きに合わせて、成年後見制度や外部監査人などに職域の拡大を図っていかねばならなくなっています。私ももっと多くの方に LEC 会計大学院で学んでいただきたいと思いますよ。私は第 2 期生でしたが、期を重ねるにつれ、カリキュラムもどんどん充実していますし、この時代にふさわしい「旬」の科目が設定され、またそれにふさわしい第一線の教員陣が教授されます。私も修了はしましたが、ちょうど今、2009 年度の後期に新設された「公会計」を科目等履修生として履修しています。また社会人学生にとってありがたい制度である「長期履修学生制度」も整っており、修業年限についてもかなり弾力的に対応してもらえますので、働く社会人にとっても無理のない学習ができるのではないでしょうか。

丸茂：LEC 会計大学院での授業を“資格試験の

ため”と捉えてしまうともったいないです。“自分のため”“この先のため”と意識して、初めて活きるものじゃないかなと思います。

若杉：我々もいつもそういう気持ちで授業をしています。なぜそうするのか、会計テクニックの背景に何か考え方や根拠があるはずなんです。そこを我々は重視しています。

諸井：大学院の教員というのはやはり研究しないと教員とはいえないんですよ。ですから教員は皆さん学術的にも教授法についても色々研究なさっている。教授の仕方も大事なんですよね。どういう風に教授したら分かり易いかっていうのもね。そういう点でも皆さんよく検討していらっしゃる。それから紀要をきちんと発行してそこに論文を書くというのも教員の１つの任務だと思うんですね。

若杉：我々教員が研究した成果をコンスタントに発表しているわけです。

内村：先生、私共もまったく一緒ですね。我々は小さな事務所ですけれども、私や職員が勉強しないと、顧問先に報酬を頂いているのにお返しできないですよ。

諸井：そりゃそうです。ですから毎年少しずつ、授業も良くしていかないと嘘だと思います。時代はどんどん変わりますからね、時代に合わせて、授業に反映させないといけないと思っていますね。そういう努力は我々もきちんとやっていかないといけないと思っております。

山本：おっしゃるとおりですね。

若杉：我々自らが常に勉強していなければ、満足な授業ができませんからね。

諸井：勉強しない教師がね、大きな顔をして教えるなんて僭越だと思いますよ。だから一生懸命努力して、勉強しています。勉強できなくなったらやめるべきです。

内村：すごくいいお言葉いただきましたね。私もそうです。先生が今おっしゃったお言葉はまさに私達も同じです。勉強しなくなったら、現役をもうやめろと。

諸井：毎日が修行なんですよ。そう思います。今日は皆さんにいろいろ良いお話をいただいて本当にありがとうございました。

一同：ありがとうございました。